

個人道徳の発達に関する研究（8）

— 家族関係における自己犠牲と自己決定 —

○首藤 敏元(埼玉大学教育学部)・二宮 克美(愛知学院大学情報社会政策学部)・崔 順子(大真大学児童学科)
蘭 桂瑞[#](首都師範大学心理相談センター)・金 順子[#](大真大学児童学科)

【問題および目的】 権威と愛情の関係を共に持つ家族関係において、家族の幸福と自己の要求とが葛藤する場面で人がどのように自己決定するかは身近な個人道徳の問題である。本報告(8)は、首藤・二宮(2001;教心)の研究を踏まえ、わが国、韓国、中国の大学生を対象に、家族関係における自己犠牲と自己優先について検討した調査結果を報告する。

【方法】<被調査者> 646名の大学生が調査に協力した。内訳は日本の大学生 234名(男子 112名、女子 122名;平均年齢 19.6歳)、中国の大学生 195名(男子 56名、女子 139名;平均年齢 20.9歳)、韓国の大学生 217名(男 79名、女子 138名;平均年齢 20.2歳)。<調査時期> 2001年9月から11月。<調査項目>家族の幸福・要求と自己の要求との葛藤を描いたテーマを7種類作成した。それぞれのテーマにつき、主人公が家族のために自己の要求を犠牲にする場面と、家族よりも自己の要求を優先させる場面の2種類の物語を作成した。テーマは次の通り。「夫の親の介護－仕事の継続:妻(主人公)」「母親の介護－進学:高校生」「両親の希望する男性との結婚－恋人との結婚:成人」「田舎の両親への仕送り－将来のための貯金:成人」「進学希望の息子のために節約・貯金－自分の老後のための貯金:父親」「妻の介護－昇進:夫」「留学－子どもと夫の世話:妻」

14の場面ごとに、主人公の葛藤・決心の重要度、自己犠牲の義務感の程度(自己犠牲場面)・自己決定意識(自己優先場面)、主人公の決定に伴う満足感の予測、主人公の決定への共感度の4つの質問を行った。被調査者はそれぞれの質問に4段階で評定した。

【結果および考察】①自己犠牲の義務感 7つの自己犠牲の義務感に関する得点を合計し、3(国)×2(性)のANOVAを行った。国の主効果のみ有意、韓国>日本>中国の順であった。②自己決定意識 7場面での合計得点に関して3×2のANOVAを行った結果、国と性の主効果が有意に

なった(女>男、日本>韓国>中国)。③決心の重要度 合計得点に関して3(国)×2(性)×2(場面)のANOVAを行った結果、性×場面の交互作用を除くすべての効果が有意になった。主な結果として、国の単純主効果はすべて有意であり、性と場面に関係なく、韓国>日本>中国の順であった。3ヶ国と場面別の性差は日本が際だっていた(女>男)。場面の単純主効果は韓国の女性を除いてすべて有意であり、犠牲>優先であった。④主人公の満足感の予測 ANOVAの結果、国と場面の主効果、国×場面と性×場面の交互作用効果が有意であった。有意な場面差は女性のみで見出された(優先>犠牲)。また、性差は自己優先場面のみ有意であった(女>男)。⑤共感度 国と場面の主効果、国×性×場面の交互作用効果が有意であった。有意な場面差は日本の女性と韓国の男性だけで認められた(犠牲>優先)。⑥判断間の相関 3ヶ国の男女別に自己犠牲と自己優先の場面ごとの4つの判断間の相関係数を算出した。自己犠牲の義務感が高いほど、予測する主人公の満足感も高かった(すべて $p < .01$)。この相関係数の国別の性差は日本だけで有意であった。自己犠牲場面での主人公の満足感と共感度との相関は、日本の女性を除いてすべて有意であった。自己優先場面では、中国の女性を除いて、自己決定意識が高いほど主人公の満足度を高く予測していた。また3ヶ国の男女とも満足感が高いほど共感度も高かった。

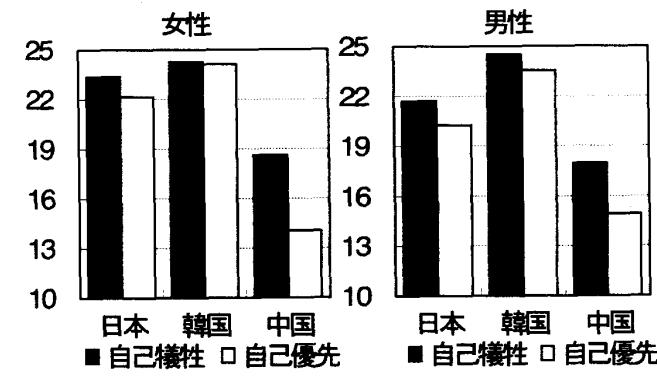


図1. 主人公の決心の重要度の判断

<付記:科研費・基盤研究(B)(2)12571008の補助を受けた>